

柳 宗悦の民芸論 (XXVII)

－柳とモース－

八 田 善 穂

目 次

- (1) モース批判
- (2) 蜷川にながわのりたね式胤
- (3) 蜷川とモース
- (4) 『観古図説陶器之部』
- (5) 蜷川の視点
- (6) 視点の相違

柳¹⁾の遺稿「日本の焼物 雑感²⁾」(全12節)は初めの2節がボストン美術館所蔵のモース³⁾・陶器コレクションに対する批判に当てられている。本稿はこの批判の内容と、モースの収集に対する姿勢との比較を通して、柳の収集観を明らかにしようとするものである。なお、本稿は拙稿「柳宗悦の民芸論 (XXIII) - E・S・モース -⁴⁾」の続編である。

(1) モース批判

柳のモース・コレクションに対する批判は大要次の通りである。

実際に行ってみると、よくこれほど集めたものだと感心させられる。集めたのは明治10年頃のことであるから、楽にしかも安く手に入ったとしても、や

1) 柳宗悦 (1889 (明治22) - 1961 (昭和36))。

2) 昭和31年頃執筆、『民藝』(日本民藝協会)第337号(昭和56年1月)および第338号(昭和56年2月)掲載、筑摩書房版全集(以下「全集」と略記する)第12巻「陶磁器の美」所収。

3) Edward Sylvester Morse (1838 - 1925)。

4) 徳山大学論叢第64号(2007年3月)所収。なお、柳の著作は旧字体(正字体)、旧かなづかいによっているが、本稿では漢字のみ常用漢字に改めた(固有名詞、著作標題等を除く)。

はり熱意がなければ、これほどには集まらない。それにモース⁵⁾は科学者であったから、できるだけ正確な研究を志した。複雑な日本陶器を、ある体系に整理することは、当時としては、よほどの手際がなければできなかったであろう。モースの研究法は、焼物にある印銘によってその系統を分類することであった。そのため在銘のものの収集に熱中した。そしてその結果、いろいろのことが明らかになった。どこの窯か分らないものも、銘によってその系統を決めることができた場合が多い。しかし、収集の内容は決してすぐれているとはいえない。⁶⁾

「五、六千点のうち、値打のあるものは一割はおろか、五分もないやうに思はれた。よくも、くだらぬ焼物を、かうまで集めたものかなと、思はざるを得なかった。⁷⁾」

柳はその理由を二つ挙げている。

一つは、集められた焼物のうち、幕末から明治初めのものが多くを占めることである。この時期は日本の焼物が最も墮落しており、取り上げるには取捨選択が必要である。しかしモースの収集には「捨」が伴わず、くだらないものが多く混ってしまった。モースは学者であっても、眼力の人ではなく、何が美しい焼物かについての判断は低調であった。日本の焼物は種類変化が極めて多いので、できることならそのすべてを集めて整理したい気持があったのであろう。そのため「種」と「量」が主で、「質」は二次的になってしまった。数が多い割に質が乏しいのはそのためといえよう。⁸⁾

「それ故かういふ収集で、日本の焼物が語られてはたまらないと思った。⁹⁾」

もう一つは、記銘を不当に重視したことである。

「日本の焼物のうち値打ちのあるのは、寧ろ無銘品であって、この分野が、等閑にされたため、その収集が美的内容に於て貧弱になって了ったのである。¹⁰⁾」

5) 柳は「モルス」と記している。

6) 全集第12巻、PP.569 - 570。

7) 同書、P.570。

8) 同書、PP.570 - 571。

9) 同書、P.571。

日本の陶磁器で記銘を施すようになったのはそれほど古いことではなく、その習慣が広まってきたのは、江戸時代のなかばから末にかけてのことである。そのため記銘のあるものは、最も堕落した末期に多いことになる。古いものに在銘のものは極めて少ない。¹¹⁾

「大体印銘入のものは上手じょうての品々に多く、手の込み入った結構なものか、又は個人の作者の手になるものである。併し多少の例外はあるとしても、在銘のものは装飾が多すぎたり、余り繊細であったり、為に生気が乏しく軟弱に落ちたものが多い。……之に反し、もっと国民の一般生活に交った実用品には、健康なものが多く、その殆ど一切は無銘品で、何等落款や窯銘が記してないのである。……それで日本陶磁のうち、最も美しいものは、無銘品にあるといふ結論は動かすことが出来ないと思へる。

然るにモルスは偏へに在銘品を追ったのである。而も前述の如く在銘品は末期になるほど多くなる。ここがその収集の美的価値を低いものにさせた原因であった。¹²⁾」

(2) 蛭川にながわのりたね式胤じょうて

柳も記す通り、「モルスは蛭川式胤氏の「観古図説」に負ひ、又同氏の援助でその研究を進めることが出来た¹³⁾」。蛭川について、平凡社『日本人名大事典¹⁴⁾』には次のように記されている。

「明治初期の考古家。祖先は丹波船井郡下高屋村の城主で、丹後守と称したが、天正中より京都に來り、世々東寺の客として厚遇された。天保六年¹⁵⁾五月二十三日生る。幼名與三郎。夙に翫古の癖あり、長ずるに及んで学識を広め、諸社寺の什宝を検討した。明治二年¹⁶⁾、三十五歳の時より、太政官の制度取調

10) 同。

11) 同。

12) 同書、PP.571 - 572。

13) 同書、P568。

14) 初版1938年刊。覆刻版1979年刊。

15) 1835年。

16) 1869年。

御用掛となり、少史に進んで従七位に叙せられたが、同四年に少史は廃官となり、外務省に入って大録に任ぜられ、編輯課に勤仕し、岩倉特命全権大使の欧米派遣のため、右御用書類下調掛となった。その五年、文部省博物館御用兼務から八等出仕となり、社寺宝物検査に出張し伊勢大廟より正倉院に赴き、更に近畿及び各地方に及んだが、同八年再び正倉院に遣はされた。なほ同五年には、東京の大成殿で博覧会を開き、博物館の起因となったが続いて京都博物館の創立を主唱した外、普く古書古器物を蒐集して、これを内外各方面に寄贈した。その十年には病を得て官職を辞したが、東京道三町の自邸に印刷所を起して自著を刊行する他、古美術工芸品の陳列所を設けた。同十五年八月二十一日没、年四十八。その著書は十数種、何れも考古に関するもので、半ばは未刊に属するが、既刊の分では『観古図説』陶器篇七冊、同城郭篇一冊、その他があって、陶器界では世界的の名著、仏独文の訳解もある。」

また式胤の令孫蛭川親正氏による蛭川の略歴は次の通りである。

明治2年5月、35歳で維新政府の役人となり、7月太政官の制度局調査係として、陸海軍の軍旗や軍刀および軍服を制定し、フランスの民法を訳して、近代日本民法の制定のもととした。民法会議に出席し、民法制定および商法、農法、工法、刑法、税法、その他の制度を確立した。明治4年10月外交文書の作成のため、外務省に入り外務大録になった。明治5年1月には文部省に招かれ、博物館の御用係となり、社寺宝物検査のため伊勢神宮を初め畿内の神社仏閣の什器を調査した。次いで正倉院の調査を行い、在庫品の目録を作った。『奈良の筋道』と名付けた日記や、明治2年より15年までの日記、『蛭川式胤日記』を遺している。東京・京都・奈良の博物館の建設や博覧会を開くことを提案し、明治4年9月、九段招魂社での博覧会を開き、博物標本や理学機械などを陳列し公開した。明治10年1月政府の役人を辞し、現在の千代田区大手町二丁目の自邸（旧幕府御普請奉行役宅）内に印刷所を起こして楽工舎と名付け、ここで『観古図説』を印刷した。この楽工舎には、シーボルト¹⁷⁾、モース、キヨソネ¹⁸⁾らが集まったように、幅広い図書館、博物館であると共に、当時の産学

17) Heinrich Philipp von Siebold (1852 - 1908) (Philipp Franz von Siebold の次男)。

一体の知識人の文化会館として開かれたものであった¹⁹⁾。

また鈴木廣之『好古家たちの19世紀²⁰⁾』にはおよそ次のように記されている。

蛭川の祖先は、宮内大輔宮道朝臣弥益たいふ みやじ あそん いやますといい、醍醐天皇の外祖父にあたり、代々山城国山科、醍醐を領有した。その後、貞栄のときに明智光秀に従って没落したが、孫の貞玄が名跡を継いで京都の東寺の公人く にんとなり、八条大宮に居を構えて京都蛭川家の中興の祖になった。公人とは大寺院に属して年貢の徴収などの雑役に従った下級の役人をいう。この八条大宮の屋敷は、モースの『日本の住まい²¹⁾』に図入りで取り上げられている。蛭川は、明治2年6月、東京に出て新政府の「制度取調御用掛」になる。3年7月に太政官の権少史、9月に少史に累進するが、翌4年7月の太政官改制のため、制度局は廃止された。在職者は罷官になり、蛭川も京都に一度帰ったが、その年の10月に再び東京へ出て外務大録になり、12月には外務大録のまま文部省博物館御用兼務になった。10月には京都で初めての博覧会があったが、開催には蛭川の尽力があった。翌5年の東海近畿の壬申検査では正倉院開封など、宝物調査の中心になって活躍した。この3月に博物館は博覧会事務局に合併され、さらに8年3月には博覧会事務局が内務省に移される。9年1月には、旧幕府御普請奉行役宅だったという丸ノ内道三町どうさんちようの自邸の建物の一部を「楽工舎」と名付け、印刷事業を企てる。3月には『観古図説陶器之部』の第一冊を刊行。翌10年1月には内務省博物館を辞職している。陶磁器の収集と研究をめぐるモースとの親しい交渉は、蛭川の辞職後のことである²²⁾。

18) Edoardo Chiossone (1832 - 98)。

19) ドロシー・G・ウェイマン『エドワード・シルベスター・モース (下巻)』中央公論美術出版、昭和51年刊、PP.251 - 252。

20) 吉川弘文館、2003年刊。

21) "Japanese Homes and their Surroundings" 1886。

22) 『好古家たちの19世紀』、PP.139 - 141。

(3) 蝮川とモース

昭和58年度より60年7月にかけて、大阪の国立民族学博物館において、共同研究「エドワード・S・モースとそのコレクションに関する研究」が実施され、その報告書の一つとして『共同研究 モースと日本』が昭和63年に小学館より刊行された。この中に含まれる蝮川親正「モースの陶器収集と蝮川式胤²³⁾」は上述の令孫親正氏の執筆になるものである。また親正氏はモースの伝記であるドロシー・G・ウェイマン『エドワード・シルベスター・モース²⁴⁾』の訳者でもある。「収集」は蝮川の近親者の手によるものであり、家蔵の資料も使われていて、蝮川とモースの関係を知るには最も好適である。以下、同論文により両者の交友状況を見ることとする。

ウェイマン『モース』によれば、ある日²⁵⁾モースは散歩の途中で貝に似た皿を見つけ、買って帰った。その後も同様のものを買い続け、日本の知人に見せびらかすので、知人たちはそれらの品が安物であることを説明した。そこでモースは日本では陶器に系統があり、よい焼物は彫り込まれた陶工の銘によって見分けられることを知った。友人たちはモースの知識を向上させるため、蝮川の自宅で開かれていた鑑定家の集会へ連れて行った。集会の様子を見て、モースは鑑定についての研究書の必要性を感じた。しかしそれは蝮川の著書『観古図説陶器之部』1冊のみであった。そこでモースは蝮川を訪問し²⁶⁾、その指導を受けるようになった。

『蝮川式胤日記』によれば、モースと蝮川との間には明治12年の1月から離日する9月初めまでに約50回の往来が見られる。また明治12年初頭から蝮川が死去する明治15年8月までの間に蝮川からモースに贈られたり廻されたりした陶器は44回にわたり、830点以上に及ぶ²⁷⁾。

23) 以下「収集」と略記する。

24) 注19) 参照。

25) 1878(明治11)年11月頃。

26) 1879(明治12)年1月7日。

27) 『共同研究 モースと日本』、PP.386 - 396。

28) 明治11年。

ウェイマン『モース』には大要次のように記されている。

1878年²⁸⁾の晩秋、東京において、モースは神経症と消化不良に悩まされ始めた。主治医は心労が原因であると考えた。消化不良のための治療法は、1日5マイル散歩することだった。主治医は心理療法を用いて「何か趣味を探しなさい。散歩の途中にすることのできる興味あるものを探しなさい」と言った。

数日後、モースは家族のものに見せようと何かを持って帰宅した。そして、陶器店でホタテガイにそっくりの小皿を見付けたことを告げた。

モースに日本の陶器に対する注意を向けさせたのは、この貝に似た皿を偶然発見したことであった。毎日街を歩いている時、彼は商店の前を通り過ぎながら、貝の形の陶器を探し、見付けていった。しかし、彼がそれらを日本の友人に見せても誰も関心を示さなかった。日本の友人は丁寧に、これらの皿が古い物でも、有名な陶工の造った物でもないことを説明した。モースは、日本では陶器の系統があり、良い焼物は彫り込まれている陶工の銘によって見分けられることを知った。

日本の友人たちは、モースがほめる安物のありふれた陶器に悩まされて、彼を鑑定家たちの集会の席へ案内した。そして彼らが品物を見分ける技法を見せて、モースの知識を向上させようとした。彼らは何時間も畳の上に車座になり、正座して、陶器を吟味していた。茶碗とか茶入れが取り出され、沈黙のうちに手から手へ渡って行く。客はそれぞれ、硯とか筆を持って、次々と回覧して行く陶器を見て、原産地、製作年代、作者名を判断して書き留める。正解の多い人には賞品が出されることもあった。²⁹⁾

この行事をモースは、ある物理的な基準によって、品物を分類する真正正銘の科学に外ならないと思い、その問題についての研究書の必要性を感じた。しかしそれは1冊しかなく、しかも公刊されていないことが分かった。それは陶器の研究者蜷川式胤の著書『観古図説陶器之部』であり、彼の所有物であった。

まもなくモースは蜷川を自分の個人的な師として、毎日曜日の午後その教授

29) モース『日本その日その日』平凡社東洋文庫、第3巻P.167以下参照。

を熱心に受けた。ここで蜷川はモースに日本陶器の秘伝、各地方の粘土の感触や種々の釉で焼く技術を教え、有名な陶工の銘を鑑別するためにモースに写生してやった。

蜷川とモースは深い親交を結ぶようになった。蜷川はモースに陶工の製作日付、地方、伝来の家系について記した自分の原稿から、モースが書き写すことを許した³⁰⁾。二人が知り合いになったのは、まさしく時節を得たものであった³¹⁾。

「蜷川は一生涯かかって集めた学識を、アメリカ人に伝え遺した。そしてその年の中に死去したのである。モースは彼の葬式に列席した³²⁾。蜷川は自分の学識を欲しがり願っていた唯一人の男、モースにその学識の松明^{たいまつ}の火を手渡していたのである。

その当時の日本、若い日本はこうした知識を保存し、その伝統的家宝を育てて行く暇がなかった。古い武士の息子たちは、…財政的に窮乏していたので、……競売人に家宝を売り払っていた。昔の茶道は若い日本の足が地に着くまで、四分の一世紀の間忘れられていた。振り子の振動が戻ると、日本人は自分たちの古い財宝が四散しているのに気付いた。モースが熱心に陶器を集め始めたのは、日本の文化がその空白の期間になっている時であった。³³⁾」

(4) 『観古図説陶器之部』

「収集」には次のように記されている。

「蜷川は自宅の「楽工舎」の土蔵三棟と、倉庫四棟のうち各一棟を陶器庫とした。室内の周囲に棚を幾段にも設け、各棚は時代別に、寸法の小さい陶器は棚の上に、大きい花活や壺は棚に釘を打ち、その釘に陶器をぶらさげていた。³⁴⁾」

各棚は出土品の土器類をはじめ、国・地方別に分類し、陶工の明らかな品は制作者別に、人物は初代・二代・三代と世代別に分類していた。すべての陶器

30) 同書、第2巻P.243および第3巻P.27参照。

31) 『エドワード・シルベスター・モース (下巻)』、PP.32 - 34。

32) モース『日本その日その日』第3巻P.167以下参照。

33) 『エドワード・シルベスター・モース (下巻)』、PP.34 - 35。

34) 『共同研究 モースと日本』、P.397。

にはラベルを貼り番号を付し、何年前の作品であるかを記し、個々に高さ、横幅、口まわり、胴まわり、厚さ、底の寸法などを記入し、スケッチをかならず描く方法であった。³⁵⁾

「この方法は江戸時代を通じて行われていた管理方法や研究方法とはまったく異なり、新境地を打ち立てたものである。³⁶⁾」

「以上の研究の成果がすなわち『観古図説陶器之部』として著した第一巻より第五巻であり、のちに六巻、七巻と発行されたものである。

第八巻は未刊となったもので、明治十五年の蜷川の死後、原稿をモースが蜷川の遺族より受け継いだ。³⁷⁾」

『『観古図説』の解説は、すべて何焼であろうとも古い時代よりの歴史にさかのぼり、現在にいたる過程をたどっているのが、当時としては未開の研究方法であった。また掲載の陶器はすべて寸法が書きこまれている。一個の陶器の焼かれた歴史とその地方の、その場所の、誰が、なにゆえに、いかにして、という疑問に答えている。……

モースはこれを系統的、科学的と認めて師事したのである。³⁸⁾」

『観古図説陶器之部』第一巻の序文（明治9年3月）は次の通りである。

「昨日ノ新ハ今日ノ旧トナリ、今日ノ奇ハ明日ノ陳トナリ、学術日ニ精シク、工業月ニ巧ミナル、新盛世ノ勢ヒ恰モ流水ノ滾々トシテ止マザルガ如シ。爰ヲ以テ世人動モスレバ徒ニ新寄ヲ愛シ、旧陳ヲ憎ムノ弊ヲ免ガレズ。大ニシテハ国家ノ治蹟ヨリ、小ニシテハ一物一品ノ微塵トナルベキ稀物ヲモ総テ棄テシテ之ヲ顧念セザルニ至ルハ、時勢ノ自然トハ云ヘドモ、到底思惟ノ輕躁、意匠ノ浅劣ナレバナリ。今ヤ新寄ノ精ヲ研クベキハ言ヲ竣ストイヘドモ、旧陳モ亦保存スル事ヲ忽ニスベカラズ。如何トナレバ、彼ノ文明ヲ見テ以テ此野蠻ヲ知り、古ヲ稽テ今ヲ曉ルハ、治政ノ急務ニシテ、其因縁スベキモノハ則チ史籍ナリ。然レドモ、史ヲ宥テ其時ヲ稽フルノ迂ナルヨリハ、実物ヲ視テ確証ヲ採ル

35) 同。

36) 同。

37) 同書、PP.397 - 398。

38) 同書、PP.398 - 399。

ニ如カジ。我国ノ如キハ古昔ヨリ肥沃富饒ニシテ、名誉著シク今ニ東方ニ冠タリ。然リトイヘドモ竊カニ想フニ、当時ノ勢ヒヲ以テ茲後二十年ヲ歴ルナレバ、従来ノ宮殿ハ毀損シ、城郭ハ破壊シ、古物珍器ハ皆海外へ転移シ尽キ、風俗ハ新寄ニ浸漸シテ、恐ラクハ時勢ノ沿革ヲ知ル捷徑ヲ失ハン事ヲ憂慮シ、今茲ニ二十有余年来見聞スルニ随ヒテ模写スル所ノ図画ヲ筥中ヨリ模索シテ、公務ノ間暇ヲ以テ一・ニノ考証ヲ綴リ、俸禄ノ羨余ヲ以テ費用ニ充テ、聊カ刊刻シ、我国固有ノ風俗ヲ遍ク内外ニ残サン事ヲ欲スルナリ。若シ後年ニ至リテ考証建覧ノ一助トモナランニハ幸甚々々³⁹⁾」

1913年、モースは“Ninagawa's Types of Japanese Pottery”と題する論文を発表した⁴⁰⁾。その中で次のように述べている。

「私は日本陶器の大蒐集をするに当り、蜷川によってなされた著作書の中に描き出された、その現物の作品をできるだけ手に入れるため努力した。この考古研究家蜷川は陶器の鑑定技術を身に付ける私の最初の先生であった。そして私は第六巻と第七巻に描かれ掲載されている、実物の作品の多くを譲渡してもらった。第二・三・四・五巻に掲載されている一部の実物は、私が日本に来るまでにヨーロッパへ運ばれていた。これ等を手に入れる希望は絶たれた。だから私は蜷川の著作に描かれた実物の作品にできるだけ類似同種の作品を得ようと試みた。この場合必ず蜷川の認証にゆだねられたものである。そして多くの場合蜷川が描いた時のものよりも一層優れた作品が手に入った。⁴¹⁾」

蜷川の著作の標題『観古図説』の文字通りの訳は“Study, Old, Illustration, Explain”または“Discourse”であり、昔の考古の事物に関する図解された論文といったものだろう。第一巻は1876年に出版され、第二・三・四・五巻は1877年の出版である。第六巻と第七巻は1880年に公にされた。第一巻に掲載された作品は蜷川の所有ではない。すなわち一部は大和の神山古墳から発掘され描写されたものである。それらは描かれたのち再び埋められた。他のものは国立博

39) 同書、PP.401 - 402。

40) ボストン美術館月報2月号所載。

41) 『共同研究 モースと日本』、PP.417 - 418。

物館とか、神社・仏閣に所有されていた。しかし、当美術館⁴²⁾のコレクションは掲載されているこれらの陶器および、それに類似した作品を所有する⁴³⁾。

「第二・三・四・五巻に掲載されている作品は最も重要なものであり、掲載された一二一点のうち当美術館が一一四点を蒐集している。第六巻と第七巻には少数の磁器と多数の新しく特色のないものが掲載されていた。

当美術館は第六巻のうち一一点の実物と第七巻の一〇点の実物を所有している。⁴⁴⁾」

このように、モースの収集は専ら蜷川の『観古図説』に忠実に拠るものであった。そこで次に蜷川の、収集に対する姿勢を見ることとする。

（5）蜷川の視点

鈴木廣之氏はその著『好古家たちの19世紀⁴⁵⁾』において、先に掲げた蜷川の序文について、次のように述べている。

「昨日に新しくったものでも今日にはもう^{ふる}旧いものになってしまう。今日めずらしいものも、明日にはありきたりのものになるだろう。学問と技術は日進月歩してますます精巧になる……。このような世の中の^{すうせい}趨勢はとどまるところを知らない。これがために、世の人たちが新しく珍しいものをむやみに^め愛でるあまり、旧いものを嫌う不幸な趨勢は避けられない、という。蜷川はまず「新」と「旧」を対比させ、それぞれに「奇」と「陳」を重ねている。もともと「陳」は「ふるい」という意味だが、「奇」と対比されると、「陳」は「めずらしい」に対する「ありきたりの」ものという否定的な意味合いを帯びてくる。「新」が「新奇」となり、「旧」が「旧陳」となることによって、両者の間に価値の高下が生じる。新しいものは評価され、旧いものは評価されなくなるというわけだ。⁴⁶⁾」

42) ポストン美術館。

43) 『共同研究 モースと日本』、P.418。

44) 同書、P.419。

45) 注20) 参照。

46) 『好古家たちの19世紀』、PP.49 - 50。

そこで、旧いものはすべてが打ち捨てられ顧みられなくなる。これは時の勢いから止むを得ないこととはいえ、まったく考えが軽率で、工夫が浅いことから起こる。今、新奇なものを明らかにすることが求められるのは当然であるが、同様に旧陳になるものを大切にすることもおろそかにすべきでない。なぜなら、西洋の進んだ文明とくらべてこちらの遅れを知り、古とくらべて今を悟ることは、どちらも世を治めるためにただちに行うべき務めであるからである。⁴⁷⁾

「蝮川はここで、「新奇ノ精ヲ研グ」ことだけでなく「旧陳モ亦保存スルコト」が行なわれなくてはならないと主張し、「新奇」と「旧陳」を同等のものとして認めようとしている。そのうえで、「彼ノ文明ヲ見テ、以テ此野蛮ヲ知」ることと、「古ヲ稽テ今ヲ曉ル」ことを「治世ノ急務」だとしている。⁴⁸⁾

この二つの「治世ノ急務」は、直前の「新奇」を研精する（詳しく調べて明らかにすることと、「旧陳」を保存することの二つの方向に対応している。「彼ノ文ヲ見」ることとは、「新奇」の淵源たる西洋の進んだ文明をつまびらかにすること（そして、取捨選択してそれを取り入れること）である。また「古ヲ稽テ今ヲ曉ル」ためには「旧陳」が保存されなくてはならない。「旧陳」なるものが打ち捨てられると、古を考える手掛かりが失われてしまうからである。蝮川は「新奇」と「旧陳」を同じように重要なものとし、二つの「治世ノ急務」の内容を具体的に示し、これによって主張の正しさを例証している⁴⁹⁾。

「蝮川は「新」と「旧」を公平に扱おうとしているように見える。しかし蝮川自身が、「新奇ノ精ヲ研グ」ことが必要なのは今さらいいうまでもないことだと断っているように、「新」の価値は一般的に認められている。蝮川の趣旨は、このような一般的な考え方に対して、「旧」の価値を認めるべきだという主張にある。要点は、あくまで「旧」を「新」と同等の位置へと押し上げようとすることにある。⁴⁹⁾

「治世ノ急務」として「古ヲ稽テ今ヲ曉ル」べきだと蝮川がいうとき、「旧」

47) 同書、P.50。

48) 同。

49) 同書、P.51。

に代わって「古」と「今」が対比的に使われている。そして「古」と「今」の間には価値の高下が考えられていない。「古」があるからこそ「今」が意味をもち、「今」があってこそ「古」の価値が見出せる。「古ヲ稽テ今ヲ曉ル」とは、そのような「古」と「今」の関係を前提にして発想されている。しかし世の趨勢により、「古今」は互いに対立する「新旧」という新しいものの見方に置きかえられた。「古今」も「新旧」も、もともとは時間の区切りに基づいた概念であり、大きな差があるわけではない。しかし「新旧」が「奇」と「陳」に重なり合い、「新奇」と「旧陳」となると事情は異なってくる。「新奇」が追い求められ、「旧陳」が顧みられなくなる。「新」と「旧」の間にこのような価値の傾斜が生じてくるのは、文明開化という「流水ノ滾々トシテ止マザルガ如」き「盛世ノ勢ヒ」のためである。「新」とは、文明開化がもたらす文物や制度、あるいは技術や思想であり、人的交流や人的資源もそこに含まれる。こうして古いものは、文明開化のもたらす「新」と真正面から向き合う「旧」の位置に転落した。あるいは、「古今」というものの見方そのものが、「新」に対立する「旧」の役割を引き受けることになった⁵⁰⁾。

「そこには、価値観の転換を促す^{うなが}だけでなく、そのもとになる、世の中に対するものの見方そのものを一変させるものがあった。たしかに、文明開化によって世界は大きく変わりつつあった。だがそれは、世界を構成する事物が変わったから世界が変わったのではなく、むしろそのような世界の見方を導く枠組み、つまりパラダイムが変わったということなのだ。⁵¹⁾」

「蜷川の試みは、明らかにこのような事態への対処に向けられていた。蜷川は『観古図説陶器之部』の序文のなかで、まず「旧陳」を「新奇」と対等の位置へと引き上げ、次に「旧陳」を「古今」の対比のなかに位置づけ、そしてこの対比の有効性を^{てこ}にして今度は「新」と「旧」の間の非対称を解消しようとしていた。蜷川の試みは、対立的な「新旧」をもう一度「古今」のパラダイ

50) 同書、P.51 - 52。

51) 同書、P.52。

52) 同書、PP.52 - 53。

ムへと押し戻し、それによって「新旧」の間の^{きんこう}均衡を図ろうとすることだったといえよいだろう。⁵²⁾」

蜷川親正氏はウェイマン『モース』の「あとがき」に次のように記している。「カタログの通りに陳列されているその保存方法は、私の家の保存方法と同じであった。驚いたことに、蜷川式胤が毛筆で三センチ或いは四、五センチ四方に書いたラベルだけは未だに貼ってあった。なお驚いたことは、この美術館⁵³⁾に陶器を運んだ時には、桐の箱やそれを包んだ風呂敷、陶器を包んだ布や、有名な茶人がいつ使ったとか、こんな大名が大茶会で鑑賞したとか、有名茶人の箱書や陶器の銘を書いた桐箱の蓋や、古い時代に鑑定した有名人の極書や書付けなどが、完全に整っていた品物が多かった。しかし当時地下室へほうり込んで、やがて焼却してしまったとのことであった。モースには陶器にまつわる記録や逸話や、日本人趣味の骨董的に価値ある付属品は不必要で、そのものずばりの分類学者であった。「蜷川式胤の陶器分類が彼の科学者としての気性に合ったのか」、「蜷川がモースの分類法に意気投合したのか」に対する私の永年の疑問は前者であることがコレクションの倉庫に入って初めて判明した。⁵⁴⁾」

そして1913年のボストン美術館月報の「蜷川タイプによる日本陶器」⁵⁵⁾と題した論文を読み、それが事実であることが確認された。その概要は次の通りである。

「この陶器は日本人の著作者によって、日本で最初に出版された、陶器に関して系統的に掲載されているその著作原本の殆どの実物を代表している。」

「この日本人とは京都の出身で、東京在住の著名な考古学者の蜷川式胤である。蜷川は日本の古い物事に関して、各方面の広範囲な研究を計画、立案した人であった。一八七六年（明治九年）日本の美術工芸という総括的な題名で著作に取りかかった。」

「日本陶器についての著作は七巻で、もし彼が生きておれば第八巻目を編著

53) ボストン美術館。

54) 『エドワード・シルベスター・モース（下巻）』、PP.248 - 249。

55) 注40) 参照。

したはずの図版や絵である。」

「私は日本陶器の大蒐集をするに当り、蜷川氏によってなされた著作書の中に描き出された、その現物の作品を出来るだけ多く手に入れるため特別の努力をした。」

「この考古学者蜷川は陶器の鑑定の技術を身に付ける私の最初の先生であった。」

「この著書の第六・七巻に描かれ掲載されている実物の作品の一部は譲渡してもらったが、第二・三・四・五巻に掲載されている実物は、私が日本に来るまでにヨーロッパに運ばれていた。だが私は蜷川の著書に描かれた現物の作品に出来るだけ類似同種の作品を得ようと試みた。この場合必ず蜷川氏が証明したものに限られていた。」

「第二・三・四・五巻に掲載されている実物を多く入手した。大英博物館は第六巻と第七巻のうち九点しか所蔵していないが、自分は第六巻の十一点、第七巻の十点を入手した。」

「当時のヨーロッパの美術館は『観古図説陶器之部』に掲載された現物や類似の作品を入手しようと懸命だった。」

「当美術館は蜷川の著書に掲載された現物や、それに酷似する同種の陶器とその陶器の極印のある品を全部収蔵している。⁵⁶⁾」

「以上のように、モースは日本で初めて、学問的で系統的に図示掲載された『観古図説陶器の部』全七巻を教科書として、これに掲載された実物その物や、類似同類の陶器を全部収蔵したことを誇っている。⁵⁷⁾」

（6）視点の相違

昭和31年に刊行された柳の『蒐集物語』⁵⁸⁾の中に、「民藝館の蒐集⁵⁹⁾」と題する文章がある。その第14節はおよそ次の通りである。

56) 『エドワード・シルベスター・モース（下巻）』、PP.249 - 250。

57) 同書、P.250。

58) 中央公論社刊、全集第16巻「日本民藝館」所収。

59) 『工藝』（日本民藝協会）第105号（昭和16年10月）所載。

私たちが他の蒐集家のもを見て、しばしば失望を感じる点は、その蒐集に不統一なものが多いことである。ずいぶん立派な作品を所持しているにかかわらず、ほとんどすべてといえるほど、同時に醜いものを平気で所持している。もっとも民俗学的蒐集のようなものは、研究の素材として集めてあるので、ものの美的価値を求めているわけではない。それゆえ価値標準による統一がないのは当然である。しかしそれでも一義的な素材と、そうでないものとの取捨がなければならぬ。そこにも一種の統一性が要求される。まして芸術的作品の蒐集であれば、そこに厳しい価値判断が加わらなければならない。はっきりとした吟味や取捨がないのは矛盾である。ところが多くの蒐集家には「取」のみがあって「捨」がない場合が多い。そのため蒐集にはいつも玉石が並存する。これはいかに理解が不鮮明であるかを明示するものである。醜いものが分っていないければ、美しいものも分っていないことを表わす。蒐集の生命となるものは統一性である。なぜこのことがこれほど至難となるのであろうか。まさしく直観的基礎の貧困による。直観によってよく選択されていれば、不統一の過ちはない。この統一性を欠くと、蒐集の内容はずっと下ってしまう。

蒐集は権威をもつものでありたい。全体として犯し難い力を示すものでありたい。厳然とした直観的な立場をもつならば、自らその蒐集には確実さが出る。知的な概念に頼る者は、断えず周囲をうかがわねばならない。不安や懐疑が伴うのは当然である。自信を持つことができない。集めるものに玉石が交錯するのは、宿命的な結果である。概念に選択の力があると思うのは間違いである⁶⁰⁾。

「惜しい哉、多くの蒐集には洗練された選択がない。選ぶべきでないものまで選ぶのは悲劇である。それ故当然選ぶべきものまで選ばないに至るのである。権威ある独自の立場がない証拠である。⁶¹⁾」

最後の部分は辛辣である。本稿冒頭に掲げた柳のモース批判とも共通するこの内容は、しかしあくまでも柳独自の美的見地からのものである。モースには、蜷川から受けついで、柳のものとは異なった収集方針があった。両者の違

60) 全集第16巻、P.685。

61) 同書、PP.685 - 686。

いが大きいために、柳の目から見れば、モースの収集は質の高いものとはいえなかった。とはいえこのことによって、モースの収集自体が無価値となるわけではない。それはむしろ、柳のいう「民俗学的蒐集」として、多大の価値をもつものといえよう。

